

# 釧路市立大楽毛小学校

(開校 大正九年四月一日)

大楽毛地区は明治になって本州各地から人々が移住し、オンネビラ(現山花)やユツパナイ(現桜田)、音羽、駒牧、新野、美濃などにも開拓の人々が住むようになった。砂丘、泥炭地に鋤を入れ、洪水、寒冷不作という自然の脅威にさらされながらも屈することなく土地を開いた。また、馬産の振興を図って、明治三十七年内藤牧場、四十二年荒磯牧場が開かれ、四十五年には大楽毛畜市場が設けられることとなった。やがて「日本一の馬市」となる大楽毛の誕生である。衣食住に目途がたつと、次は子弟の教育である。大正九年、赤いハマナスが咲き乱れ、白いハマナスが咲き誇る大楽毛の砂丘に校舎建築の槌音がこだましたのである。

大正 九年 四月 釧路区釧路第二尋常高等小学校大楽毛教授場として発足、児童数二九名、女教師一名  
一二年 四月 釧路市大楽毛第二尋常小学校大楽毛分教場と改称する。

昭和 五年一二月 釧路市大楽毛第一尋常小学校と改称する。  
七年 九月 新校舎落成、教室二(内一は運動場)  
一六年 四月 釧路市大楽毛国民学校と改称する。  
一七年 六月 鉄製品供出  
二〇年一〇月 学校保管の武器、武具等一切を破壊または焼却する。

一二月 食糧事情が悪いので、午前授業とし、午後は家庭学習とする。  
一五年 七月 本校校章制定  
二五年 七月 校舎増改築落成 一教室、職員静養室校長住宅切離し、別棟となる。

二九年 六月

鳥取中学校へ通学のためのスクールバス運行開始

三四年 四月

六学級編成となり、体育館を仕切り、職員室、廊下を改造する。

昭和三十四年、本州製紙工場の釧路工場新設に伴い、複式の学校規模から一挙に単級六学級に膨れ上がり、翌三十五年には十二学級の多学級となる。漸次この地域に進出する中小企業、住宅団地に伴う児童増により大楽毛小学校は大きく変貌するのである。

三五年 九月

校歌制定

四五年 一月

釧路市立桜田小学校児童を受入れ、本校に統合する

四八年 八月

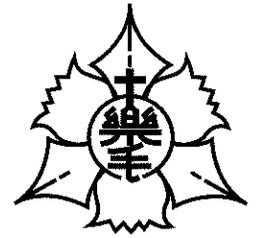
プールの温水工事を完了、市教委、本州製紙、PTA等多数参加してプール開きを盛大に行う。

五〇年 六月

東京都千代田区立錦華小学校と「すずらん」を通じて友好を深める。

ところで、本校の古い記録の中に「後援の歴史」というのがある。開校以来の地域住民、PTAの協力、奉仕、寄付等文字通り学校支援、バックアップの記録である。紙幅の関係で詳細は省略するが、戦前は校舎用敷地の寄付が何度もあり、戦後の物資不足の時代(昭和二十一年)には、児童文庫の設立、図書購入、備品として学校側が希望した物として(オルガンまたはピアノ、電蓄、運動場大時計、平均台、野球用具、ラジオ、井戸、足洗い場、写生台)等の記録がある。時代の一面を見る思いがする。

校章とその由来



位置することを示す。

校章には、スズランのほか、校名の「大楽毛」がアレンジして使われ、また、三本のペンが使われている。スズランは大楽毛の地域性を、ペンは文化日本を表す。

全体として、ペンの表す日本の文化を身につけ、地域の花であるスズランの純白の清らかさに大きな理想を育み、「楽毛」を包む「大」のアレンジが描く円が、未来に向け、世界の子どもと手をつなごうという願いが込められている。

また、この校章は彩色すると大楽毛の地域性を見事に表している。「大楽毛」部分が緑、スズランが銀色、アレンジした「大」の字が囲む部分は灰色。かつての大楽毛は砂丘の周りにスズランが群生していたので、灰色(砂)を緑(草原)スズランの(群生)が囲む配図は砂丘に群生するスズランの様子を表している。

校歌とエピソード

昭和三十五年五月十二日、PTA役員会は校歌の制定について協力することを決め、作詞を更科源蔵氏に依頼する。

昭和三十五年九月九日、更科 源蔵作詞、筒井 秀武作曲による本校校歌が制定された。

作詞の更科源蔵氏は八月三十一日付書簡で、詞について次のように

述べている。

「のびのびとした風景をとり入れて、大らかに歌へるようにと、少々型破りにつくってみました。然し、学校の教育目標の『健康、清純、協和、責任』を織りませたつもりでございます」《原文のまま》

昭和三十四年から三十八年まで本校に在職した牧五郎先生(元新川小学校校長)は『校歌にまつわることも』を寄せてくれている。

「私が昭和三十四年札幌の大学を卒業し初めて勤務した学校が大楽毛小学校でした。

丁度本州製紙(現王子) 釧路工場の建設が始まった時で、本州製紙関係者のクラブや住宅や独身寮、関連企業の工場や宿舍や住宅等できて住民も激増し、恰も本州製紙の企業城下町として、地域の一大転換期でした。当然学校もその影響(恩恵?)を受け、転入生が引きも切らず、年々学校の規模を大きくしていき、教材や教具の寄贈を受けたり、映画鑑賞会や地区懇談会等にも工場の施設を大いに使わせて貰ったりしました。

日本各地からの転校生と在校生との融和・協調のためと学校の体裁からも『校歌』を希望する声があがり、翌三十五年に制定されましたが、おかしな重々しさの無い分かりやすいやさしい言葉で、明るく軽やかでどの子も伸び伸びと歌え、何処でも口ずさめる素晴らしい校歌だと今でも思っています。

聞いた話ですが・・・この校歌が地域住民間のギクシヤクした感情を解消し、校歌の歌詞が釧路への転勤を嫌った家族の説得に役立ったそうです。かつては、校舎から見えた海岸の砂丘列とそこに咲く真っ赤なハマナスや可憐な鈴蘭を今は目にする事が出来ない住宅地になっていますが、やはり海はほくらを呼んでいるのです」

参考資料 「学校沿革史」

開校七十周年記念誌「新世紀への飛躍」

(平成十二年十一月四日)

大楽毛小学校 校歌

更科源蔵 作詞  
筒井秀武 作曲

明るくのびのびと  
mf ♩ = 76~80

うみがぼくらにうたうのだ  
なみがわたしにはなすのだ  
ひろいせかいの  
ぼくたちは  
ゆめときぼうとよるこびの  
きょうどのほしになるように

大楽毛小学校校歌

- 一 海が僕らに うたうのだ  
波がわたしに 話すのだ  
広い世界の 僕たちは  
夢と希望と よろこびの  
郷土の星に なるように
- 二 山が僕らを まねくのだ  
雲がわたしを 誘うのだ  
高く自由に きよらかに  
強く元気で たくましい  
郷土の誇りに なるように
- 三 広い原野も よんでいる  
僕もわたしも よんでいる  
雪や寒さに 負けないで  
大きく大きく のびのびと  
郷土の花に なるように